

山あり谷あり



落書 福太郎

安永元年（一七七三）の初春。冬に耐えてきた府内の梅の木々に花が咲き始めていた。

旗本坂部十郎右衛門、二十五歳は、書院番の泊り番の仕事を終え、瓦葺の白亜の土塀の続く道を若党、槍持ち、草履取、そして挟み箱持ち四人を従えて、屋敷に着いた。若党がご主人様のお帰りと門に向かって叫んだ。物見窓から顔を出した門番は、急いで長屋門の両開き扉を開けた。安堵した十郎右衛門は、五百坪ほどある敷地の奥南側建つ母屋に入った。妻の富子が玄関に迎えでていた。

寝間に入り、富子に手伝わせて、十郎右衛門は肩衣と袴かたぎぬ はかまが組み合わさった長袴を脱ぎ、小袖と羽織に着替えて居間に行き、みそ汁と漬物をおかずに朝餉を取った。

「富子、明日の朝番も登城するぞ」

「明日はお休みでしたのに」

「休みだったのだが、番頭の青山様からのお呼び出しがあったのだ」

富子は、空いた十郎右衛門の椀に飯を盛った。

湯をかけ、十郎右衛門はあっという間に流し込んでしまった。

「良いお話ですか」

「分からん、一寝むりする」

富子は急いで布団を敷きに席を立った。

十郎右衛門は、寛延元年（一七四八）、徒組頭の父田沢信吾とふさの次男として生まれた。信吾は、御目見以下の御家人で役高は百五十俵三人扶持、役務は作事方や小普請、江戸城の諸門の修復、寺院修復、堀浚などの土木建築工事や編集事業を手伝う書物御用そして、暦・測量御用などの要員の取りまとめ役であった。信吾は、学問に励み、昇進することに生きがいを感じていた。

この年、西国は大虫害によって米や麦等が大打撃を受けた。そして数年の間、百姓たちは大飢饉により飢えとの戦いであった。信吾の役高も、百俵に減らされ、家計のやりくりは苦しかった。

そのような時代に育った十郎右衛門、背丈五尺（百五十センチ）、体重は十二貫（四十五キロ）と貧相な体形であったが、手先が器用で、大工や左官工事をこなし、周りに人間から重宝されていた。ただ、正義感が強く、だれに対しても正しいと思ったことは曲げずに処するので、人間関係を損ねることが多かった。そんな十郎右衛門に遊びや呑みに行こうと声をかける人間は数少なかった。

二十二歳、十郎右衛門に転機が来た。坂部家から養子縁組の話がきたのだ。坂部家は、将軍に謁見できる御目見の旗本で富子の父親半之助は、書院番勤めであった。旗本と言っても三百俵取りと役高は低かったが、十郎右衛門の父の徒組頭役高の倍以上であった。

幸運を掴んだ十郎右衛門に周りからねたみや嫉妬を買った。旗本は、三河時代から戦場で主君の軍旗を守った武士団をさし、徳川家家臣が中心となっていた。

富子と祝言を挙げた数か月後、半之助は、隠居した。

十郎右衛門は、書院番の役職をあまりにも早く得、自分でも信じられなかった。しばらくの間は、夢の中にいるようであった。五百坪の敷地内には、十郎右衛門たちが居住する母屋と使用人の住む平長屋がある。便所、風呂、そして井戸は二つずつあった。使用人は、門番、槍持ち、中間、若党、草履取、用人、下働きの女中たち十人が坂部家で働いていた。

書院番士といえば小姓番組と並び合わせられ両番筋と言われ、旗本・御家人のなかでは、いちばん毛並みの良い家でなければなれなかった。そして、他の役職と異なり、出世の道が開かれている。うまくいけば、大名クラスにもなれる可能性があった。番方と呼ばれ軍事家臣団で、若年寄配下では、ほかに新番、小十人組、火付盗賊改があり、また老中配下では、大番、旗奉行、槍奉行があった。老中は国政を担当し、老中につぐ地位の若年寄は、旗本や御家人の支配を中心とした政務を担当していた。

その書院番は、四組によって構成されていた。一組は、御目見以上の旗本からなる番士五十名と御目見以下の御家人による与力十騎、同心二十名の構成からなる。番頭は、その組の指揮官である。勤めは、朝番・夕番・泊番があり、白書院の北の詰所に駐在した。

大番と同じく将軍の旗本部隊に属し、他の足軽組等を付属した上で、備内の騎馬隊として運用されるが、敵勢への攻撃を主任務とする大番と異なり、書院番は将軍の身を守る防御任務を主とする。

十郎右衛門は、書院番士として勤め始めてから、仕事人間で、残業を嫌がらずにこなし続けた。また、遊び事は一切せずに、毎日が城と屋敷の往復で、真面目過ぎるほどの性格、楽しみは、屋敷

に帰ってからの興味を持っている算学の書物を読むことと非番の時の剣術の稽古をするぐらいであった。

関流の有馬頼ゆき（久留米の藩主）の『拾璣算法』を特に好んで何度も繰り返し読んでいた。この本には点竄術（字句を直すことで、方程式の諸項を消去・加筆するさまを表現したもの）や円理の諸公式など、それまで関流の重要機密であった高等な算法の数々の問題と結果が記載されていた。

剣術の稽古は、物心ついた時から通っている北辰一刀流の浅場道場に汗を流しに行った。

一方、職場の連中のほとんどが、親の世襲の書院番士のためか、お坊ちゃんで遊び好きであった。その連中から、勤め始めた時には、吉原に行こうとたびたび誘われた。十郎右衛門は、最初は用事があると言っていたが、最近ではその言い訳が面倒になって、「某は、男色が趣味」と言って、断り続けていた。

そんな気持ち悪い十郎右衛門に仕事以外の話をする者は、何人もいなくなった。

坂部家は、堅物の十郎右衛門にさらなる立身出世を望み、半之助は、隠居後、酒を断ち、半之助の妻は、毎日、百度参り、女房の富子も、水垢離を欠かさなかった。

十郎右衛門は、半之助に上司の屋敷に毎日ご機嫌伺いをするように、繰り返し言われていたが、そこまでして出世をしたいとは思っていなかったのも、二人は気まずい関係になっていた。

支度を終えた十郎右衛門に富子が、

「旦那様」と言って、長刀を渡した。

「いってくるぞ」

「行ってらっしゃいませ」

春の青空に陽の光が白い壁を輝かせたお城の天守閣がそびえ建っていた。

控えの間にお城坊主が十郎右衛門を案内した。

すでに、部屋には、四人が詰めていた。その中に、浅場道場の同門の二人、山下忠友と菅沼新三郎の二人が座していた。

十郎右衛門は、山下の後ろに座らせられた。後から、やはり同門の小納戸の立山新之助が案内されてきた。お城坊主が、全員そろったのを確認して席を立った。

しばらくして、先ほどのお城坊主が、若年寄の安藤信成を導いてきた。そして、十郎右衛門は、徒頭を命じられた。一方、立山は町奉行所、山下は使番、菅沼は目付に異動となった。

「坂部、出世だな」

菅沼が十郎右衛門に声をかけた

「お前も目付とは栄転だ」

十郎右衛門が答えた。

「山下と立山も誘って、飲みに行こう」

菅沼が行って二人に声をかけに行った。

そして、行きつけの居酒屋‘弥助’に四人が集まりそれぞれの夢を語り続けた。

十年過ぎた。将軍は、家重から十代目の家治に移っていた。十郎右衛門、三十六歳になり、使番に昇進していた。山下忠友は目付に異動していた。

使番とは、治績動静の視察、幕府の上使として城の受け取りの立会や京大阪等要地の巡視などの業務であった。

この年、明和四（一七六七）年田沼意次は、側用人の地位に着いた。意次は、商業を重んじる政策を取るため商人たちを優遇した。株仲間を積極的に公認し、独占権を保証しその見返りとして、運上金を徴収した。さらに、幕府による専売制を推進し、銅座や鉄座などを設置した。貿易面では、金銀を輸入し、銅や俵物（海産物）などを輸出し、長崎貿易の拡大を図った。それにより、商人たちは、多くの財を成し、その一部を意次たち幕閣にお礼として、渡し続けていた。これにより、農民たちに貧富の差が広がり、貧農の多くは江戸に流れ込んできた。

使番になっても、年を重ねても相も変わらず、十郎右衛門は、曲がったことに対しては、上司であろうと他の職場の人間であろうと、徹底的に議論を吹っ掛けていた。

半之助は、いつかしっぺ返しがあるのではと心配で十郎右衛門に夕餉を終えた後に言った。

「十郎右衛門、田沼様が、御側用人につかれた。土産でも持って、お屋敷に行つて来なさい」

「父上、某にはそのようなご機嫌取りなど、出来ませんしやりません」

「いつも出世したいといっているのに、なぜ儂の言うことを聞けんのか」

「父上だって、付け届けなどやったことがないのに」

「儂のように出世できなくてもよいのか。後悔するぞ」

「そのようなことで出世できなくても後悔なんていたしません」

「おまえは、出世の意味がまだ分からんのか？」

「お上にたくさん奉公するために出世するのです」

「そうだ、だからどんどん出世してお上に多く奉公できる地位を射止めよ」

「私は、言いたくないことを忠言したりして、お上のために・・・」

「もっと上を見ろ、最高の奉公は、家老になることだ」

「そんな無理無体なことを」

といて、十郎右衛門は顔をそむけた。

(困ったものじゃ) 半之助は、十郎右衛門のこれ以上の出世を諦め、孫を待つことにした。

そのため、半之助は、富子の顔を見るたびに「子はまだか」と催促した。

半之助の妻は、その執拗さのため、暫し半之助をとがめた。

二話

十郎右衛門の噂が意次の耳に入った。意次の取り巻きたちは、十郎右衛門が危険人物だといって、遠ざけるようにと上申した。

数日後、十郎右衛門は若年寄呼ばれ、徒組頭の役を命ぜられた。

「富子、降格だ。また徒組頭だ」

こわばった顔をした十郎右衛門が、出迎えた富子に腰から抜いた長刀を渡しながらか言った。

「・・・・・・・・さあ、早くお着替えを」

一瞬言葉に詰まった富子が、振り絞る声で言った。

袴を脱ぎ、小袖の着流しに着替えを終えた十郎右衛門は居間に入った。味噌田楽、海苔そして香物が載った箱膳と酒が用意されていた。

重苦しい雰囲気の中で、皆黙って、食した。

皆が食べ終わった時、十郎右衛門は、盃をおいて言った。

「某だけが、降格だ」

「そうですか」

富子は、感情を表に出すのを抑えた。半之助は、お茶を床に置いて、言った。

「十郎右衛門、そなたには、何度も言ったぞ。変な正義感は、出世の妨げじゃと。お目見以下に降格とは前代未聞じゃ、ご先祖様に申し訳が立たん」

「父上、私は間違ったことはしておりませぬ」

「そんな言い訳が通る時代か。田沼様に嫌われるとは」

「あなた、もう一本つけました」 富子が、十郎右衛門の盃に注いだ。

「降格といっても、お徒組頭ではありませんか。そのうち良いこともありますよ」半之助の妻が言った。

書院番から昇格して徒頭になるのが、順当な出世コースであったが、十郎右衛門は徒頭の部下の徒組頭を命ぜられた。その徒組の主要な任務は、江戸城内の警備であった。十郎右衛門は、そのうちの御膳場の警固という地味な仕事であった。十郎右衛門は登城しない日は、天気の良い日は、浅場道場に通うか近くの池で釣りをして時間をつぶし、雨の日は、家にこもって、読書にいそしんだ。

そんな十郎右衛門を心配して、坂部家では、十郎右衛門の出世を祈念して、父親は、酒を断ち、半之助の妻は、毎日、百度参り、富子は、水垢離を続けていた。

三話 抜擢

暮れ六ツ（六時）、御三卿（田安、清水、一橋）のひとり、一橋治済（ひとつばしはるさだ）の屋敷では、御三家の水戸、尾張、紀州藩の江戸詰家老たちが集まっていた。

治済が、口火を切った。

「江戸界限では、打ち毀しが朝夕と関係なしに多発している。ご政道が危なくなってきておる。ここに集まっていたいただいたのは、この状況下で如何にご政道を守るか。水戸の治保様は、どのようなお考えかな」

水戸の家老が、言った。

「わが殿は、田沼殿に代わる器量の者は、松平定信、酒井忠貫、戸田氏教様の三人しかいないと言われております」

治済は、頷いた。

「どうであろうか、尾張の宗睦様のお考えは」

「殿は、松平定信様の白川藩の治政をかっております」

「治貞様は、如何仰せか」

紀州の家老が答えた。

「殿は、定信様の白川藩の数多くの実績は存じておりますが、將軍の縁者は難しかろうと言われており、酒井忠貫殿を押しただらいかかと申されております」

「治貞様の言われるのも分かるが、幕府転覆かという時期に、過去の習いに従うこともありますまい。定信殿は、幼少期より聡明で知られており、そしていずれは第十代將軍家治の後継と目されていた。しかし、田沼を‘賄賂の権現’と批判したため存在を疎まれており、意次の権勢を恐れた一橋家当主の治済によって、久松松平家の庶流の白河藩第二代藩主松平定邦の養子とされてしまった。意次に怨みやつらみから、今までの田沼の政治を一変させてくれるだろう」

治済は、一息ついて続けた。

「定信殿自らも幕閣入りを狙って、意次に賄賂を贈っていたようだ。うまくいくかもわからん。まずは、定信殿に老中になってもらうよう大老の井伊直幸殿に進言したい旨、御三家の殿へ書に致すので、しばらくお待ちください」

と言って、治済は席を立った。

しばらくすると、女中たちが、酒と肴を運んできた。

数日後の四ツ（朝十時）、江戸城本丸御用部屋では、水野忠友、鳥居忠意、牧野貞長、阿部正倫たち、老中四人が集まっていた。そこに、田沼意次はいなかった。

水野忠友が口火を切った。

「御三家、御三卿の方々から、松平定信様を老中に殿上申が出ていますが、各々方のご意見をお聞きしたい」

鳥居が答えた。

「將軍の縁者を幕政に参加させてはいけないとの家重様の上意があります。ここは、断固拒否しなければなりませんぞ」

「鳥居殿の言われるとおりでござる。お断り申され」

牧野が、続いた。

「某、大奥の滝川様に根回しをいたそう」

幕閣の田沼派によって、御三家らの定信擁立工作は頓挫してしまっただが、翌年の天明七（一七八七）年の五月二十日、飢饉による米の値上がりに対しての憤懣のため、江戸府内のあちらこちらで、打ちこわしが始まった。

意次は、鎮静化するために二十万両を使い、暴徒たちを鎮静化させた。

しかし、幼い将軍家齊は、御三家の言うことを聞いて、意次たちに命じた。

「将軍の御膝元の江戸でなんということだ。威厳の失墜、お前たちは、責任を取れ」

と怒り心頭、田沼派の首領格、御側御用取次の本郷泰行（やすあき）と横田準松（のりとし）を解任、その三日後、田沼意次も、責任を取らされ罷免された。

そして、定信が、老中に抜擢されすぐに筆頭になった。定信は、今まで意次の重商主義を重農主義へと転換を図る事を急いだ。

定信、三十歳。

（意次の息のかかった連中を一掃しなければ）定信は、御三家、御三卿に根回しをした。さらに田沼派の連中たちへ御庭番を放ち、様子を探らせた。

夜も静まったころ、報告が届いた。定信は、縁に出た。

「殿様、老中松平康福（やすよし）様は老中を二十五年、自分の意見を主張することもないし、持ってもいないようです。ただ、温厚なので、世間から慕われているようです」

「ご苦労であった」

翌日には、次々と御庭番から、定信に報告された。

「水野様は、田沼様から養子を迎えたりして、昇進を重ねて行ったようです。勝手掛をお勤めの時、極度に財政を悪化させています」

「牧野様は、今のところ悪いうわさはありません」

定信は、熟慮を重ねて、やっと行動に出る性格であったため、結論を出すには時間がかかった。

御三家にも相談して、将軍補佐役としての座を得るように画策し、意外に早い時期に首座なることができ、それを機会に老中たちを次々と罷免した。

そして、新老中として、松平信明、松平乗完（のりさだ）、本田忠壽（ただかず）、戸田氏教（うじのり）が就任した。

天明八年（一七八八）十郎右衛門が徒組頭の役職についてから十年が経った。相も変わらず過度の潔癖症や正義感のため、上司であろうとだれであろうと正しいと思ったら、意を曲げないため、以前以上に、上司から疎んじられていた。

（わしは、この性格のままでは、隠居するまで御目見以下の番士のままか、せいぜい進物番ぐらいで終わるのであろうか。それもやむをえまい）と十郎右衛門は、達観しているかのように見えたが、酒を飲むと相手方に愚痴やうつぶんを晴らすような言動が多くなり、酒の席では、十郎右衛門から皆が遠ざかりたがるようになった。

家でも酒の飲み方が荒くなってきて、富子を困らせていた。

非番の日、十郎右衛門は、寝苦しい夜からやっと寝付いたと思ったら、二日酔いのむかつきと朝からの蟬の鳴き声ですぐに目を覚ました。

ため息をついた。（気分をかえて、釣りでも行くか）

起き上がって、煙管に煙草をつめた時、

「旦那様、お城からお使いの方が見えました」

富子の声が襖の向こうから聞こえた。

「何用だと」

「すぐに徒頭が登城するようになって帰られました。すぐにお支度を」

「分かった」

「お食事はどうしますか」

「いらん、すぐに登城する」

徒頭から、勘定奉行の久世広民が広間で待っていると伝えられた。

(一体何だろう) 十郎右衛門が考える間もなく、

坊主が、すぐに十郎右衛門を久世の所に案内した。

「坂部十郎右衛門でございます」

「おぬしが坂部か」

「坂部十郎右衛門、勘定役を命ずる」

十郎右衛門は、はっはと床をこするほど低頭した。

十郎右衛門の役職の勘定役は、勝手方勘定奉行の配下である徴税および領地支配の中でも経済面に関する事務処理を担当する「取箇方」の勘定として配属され、直属の上司は、勘定組頭の広田朔太郎、そして勘定奉行は、久世広民であった。

十郎右衛門は、すぐに友人の立山に会いに行った。立山は、十郎右衛門の栄転祝いにと、山下と菅沼に声をかけ、隅田川のほとりの船宿で宴を設けた。

しばらくたつと、女将が用意できましたと菅沼に伝えに来た後、菅沼が立ち上がっていった。

「みんな、これから屋根船に乗って、大花火の見学と行くぞ」

船着き場の船の中に四人が腰をおろすとすぐに、辰巳の芸者が、屋根船の鴨居にちよいと手をかけて、膝から先に仰向けになってすべりこむように十郎右衛門たちのところに入ってきた。

「粹だね」菅沼が芸者に向かっていった。

十郎右衛門の不機嫌そうな顔を見ながら菅沼が盃に酒を注いでいった。

「今日は、この坂部の出世祝いだ。おねえさん、よろしく」

「はい、わかりました。あたしは千代といいます。よろしゅうお願いします。さあ、坂部様、一杯いかがですか」

十郎右衛門は、盃を持った。

「だんな、そんなしかめ面しないでくださいよ」

「坂部、飲め」

立山が笑いながらいった。

「坂部様はまじめな方」千代は十郎右衛門の朱に染まった顔を見た。

「千代さん、何か面白い話をしてもらえまいか」菅沼が、話を変えた。

「そうですね、昔の話になりますが。あの紀伊国屋文左衛門さんがこの隅田川で盃流しという遊びをやられたそうです。数千の朱塗りの盃を船から流したとのこと。その後、これをまねて、学者柳屋長右衛さんの息子鯉三郎さんが茶道具屋の娘さんを娶る前にやろうとしたところそれを知った長右衛さんが間一髪止めに入ったそうです」

「なぜ止めたのですか」山下が聞いた。

「それは大変お金がかかるだけでなく、御上から目をつけられたら大変なことになると思ったからではないでしょうか」

体中赤く染まった十郎右衛門は頷いた。

ドーン、ドーン、ドーン

「花火大会が始まりました」と千代がいいながら、体の向きかえて障子戸を開けた。

夏の夜空に大輪の花が咲き、川面にもそれが映し出された。

寛政三年（一七九一）八月十三日。定信は、田村時代の勘定奉行の青山喜内を閉門蟄居に押し込み、そして、久世広民を勘定奉行に採用した。

登城した十郎右衛門たち勘定役四人と組頭の広田はすぐに、久世に呼ばれた。

「早速集まってもらったのは、松平様から武家への借金棒引き、定信さまは棄捐と言われていたが、そのご提案があった。その内容だが、二十年以上前の借金は棄捐、十九から十年までは二十年賦か無利子、五年前までは十五年賦とするものだ。これによって、札差たちに影響が出るのは必至だが、どの程度のものか、まずは現在の札差の経営状況を調べて欲しい。町奉行所との共同調査になるので、心してかかってくれ」

「期限はいつまででしょうか？」

広田が聞いた。

「三月十一日までに結果を持ってこい」

「承知いたしました」

「組頭、これは借金の踏み倒しではありませんか。こんなことあっていいのでしょうか。借金棄損などしたら、札差との信頼関係が損なわれます」

「坂部、札差と我々の同輩の武士たちとどちらが大事だ。お前も武士なら、文句言わずにお奉行様に従え。まずは、札差の経営状況を調べるのだ。おまえたちも分かったな」

十郎右衛門たちは、翌日から、手分けして、朝から晩まで札差たちをまわった。

まだまだ朝晩は寒く、十郎右衛門はとうとう風邪をひいてしまった。

「あなた、無理されないで、今日はお休みになったらいかがですか」

富子は、心配そうに咳をする十郎右衛門に声をかけた。

「皆に迷惑をかけられない、行ってくる」

三月十一日を迎えた。

十郎右衛門は、やっとのことで登城した。

「坂部、おぬし顔色が悪いぞ」同僚が、心配そうにいった。

「大丈夫だ」

寒気に耐えながら十郎右衛門は広田たちに続いて、久世の部屋に入った。

広田は、調査結果を説明し始めた。

「お奉行、百軒ほど調査した結果ですが、自己資金で運営しているものは七軒、そこそこに営業しているものは二十二件、残りはすべて、よそから資金調達しながら何とか営業をしているのが現状です」

「何、ほとんどが弱小ばかりではないか」

「仰せの通りです。このような状況では、借金を棒引きしたらほとんどの札差は潰れてしまうでしょう」

「また恨みを買って、今後武家に金を貸すところは皆無になってしまいます」

十郎右衛門が、急に声を上げた。

久世が十郎右衛門を睨んだ。

「分かった。広田、この二日間で何とかうまく施行する方法を考えてくれ」

「承知いたしました」

早速、広田以下は職場に戻り、皆に考えを述べるよう促した。

「会所をつくって、全国の富裕な商人に出資させて、札差が融資していた分をすべて肩代わりさせるのです。その資金を武家へは一割で貸し、札差はその利息の一分を取って、会所が九分を取ることになれば、問題なく、札差は営業を存続できるだけでなく、社会に金が回り武家にも資金が行きわたる一石三鳥の案と思いますが、如何でしょうか」

十郎右衛門が早速今まで考えていたことを述べた。

「しかし、商人が、すぐに出資するだろうか？」

同期の戸部武之進が、心配顔で言った。

「そうだな、彼らとてすぐにはこのやり方を信用しまいな。誰ぞ、ほかに妙案はないか」

広田が言った。

「公儀の資金を幾ばくか札差に無利子で貸し付けたらいかがでしょうか。損をこうむる札差も、納得するでしょうし、富豪の商人たちも安心して出資すると思います」

十郎右衛門より三歳年上の片野鉄之助が、言った。

「それは妙案だ。この案で行こう。坂部、公儀の資金がどれほど出せるか調べてくれ。戸部、おぬしはどれほど商人たちから資金が集められるか予測してくれ。片野は、この案を報告書としてまとめろ。良いか明日いっぱいまでだ」

広田は皆に向かって言って、席を立った。

三日後。勘定奉行の久世広民及び久保田政邦、町奉行の初鹿野信興及び山村良旺（やまむらたかあきら）が、定信のもとに集まった。

久世は、案を四半刻（三十分）かけて説明した。

説明を聞いた後、定信が口を開いた。

「公儀からの出資は、五万両では多すぎる、減らせ。そして、この案をしっかりとめてくれ」

定信を見送り、久世の部屋で、久保田、町奉行の初鹿野及び山村たちはこの案を評議した。

「樽屋与左衛門にも参画してもらったらいかがでしょうか」 一番年下の初鹿野が言った。

「それがいい、儂が樽屋に頼もう」

山村が答えた。

今後は、久世が中心になって取り勧めることに決まり、一刻半（三時間）ほどかかった評議は終わった。

蝉の鳴き声が府内のあちらこちらで聞こえ始めていた。定信のもとに久世達奉行の四人とその供たちが集まった。そして、久世の供をしてきた十郎右衛門が、恐る恐ると定信の前にすり進み、書類を渡した。

しばらく定信は、その書類に目を通してから言った。

「始めるがよい」

はっと言って、久世はやや緊張気味に説明し始めた。

「まずは、救済内容ですが、六年前までの借金は返済免除、五年以内は利子を六分に減らす、直近は一割二分とします。原案の二十年以前を棒引きということにしていたのですが、それでは古い借金がなかなか解消できません」

一息ついて、定信に目をやった。

「次に今回の棄捐令は札差のみで、他の町方の取引は全く関係ない旨の御触れを出し、他のものを安心させることにします」

さらに詳細について、四半刻ほど説明を続けた。

「以上、この棄捐令は、九月に公布、十月施行としたいと考えますが如何でしょうか」

久世は、書類をたたみながら言った。

「傲慢奢侈な札差たちを武家達皆が憎んでおる。その輩に、五万両ものの公儀の金を無利子で貸与するのは甘すぎるのではないか。二万両ぐらいにしてはどうか。またこのての法が施行され、公儀が出資すれば、御家人に直接公金を貸し付けるようなものだ。だから、札差に融資している者たちは、金元は公儀ですと宣伝するものが出るであろう。よって、公儀の出資は施行後の3か月後にいたそう。では九月までに準備を頼む」

(定信さまは、先の先まで読んでいらっしゃる) 十郎右衛門は感心した。

「承知いたしました」久世が答え、そして皆低頭した。

八月の末、ほぼ公布の準備が整った。久世達が、至急とのことで、定信に呼ばれた。

「今後、分限高に応じて貸付の金額を定め、それ以上は絶対に貸さないと定めてしまうと、分不相応に借金した者は返さなくてもよい道理になってしまい、今まで貸してきた分が道理に外れたことになってしまわないだろうか？近頃、人情が薄くなり、利に敏くなって自分が貧乏であることを公然と吹聴しても構わないと思ひ、それを恥と思うことがなくなってきた。札差からの借金を今後は公儀の役所に申請して借りることにすれば、制限以上の額の借金ができなくなって景気の悪化の原因になるかもしれないし、特に公の場へまかり出て借金するようになっては、世間の目を恥じることもなくなるきっかけになってしまわないだろうか？または、恥を重んじて借金できなくなってしまわないか？」

定信が、憂鬱そうに言った。

(今頃になって何を) 久世は怒りが顔に出るのを何とか抑えた。

「久世、なにか」

「いいえ、なにもありません。ご心配の件、ごもっともでございますので、検討いたします」

一か月後、久世達が定信に再度上申した。

「貸出金については、禄高百俵に三十両を基準として運用したいと思ひます。また、取引のある武家の名前と切米高を貸付金がある者もない者も書面で出すようにさせます。これでいかがでしょうか」

「もういい、借金する武士に恥だと自覚させることだ」

九月十六日。勘定奉行所の白洲に札差たちが集まっていた。しばらくすると、十郎右衛門た

ちが出てき、後から久世が出てきて座った。

「皆に申し渡す。．．．．．」と言って、折りたたんだ紙を広げ読み始めた。

最後に、「本日より棄捐令を施行する。これは老中筆頭、松平定信様の命だ、分かったか」

一方、町奉行所では、奉行の初鹿野信興が、七人のご用達商人を集め浅草猿屋町の会所に出資するように命じた。

棄捐令が出て七日後。二十八人の札差が町奉行所を訪れ、この棄捐令によって、家業を続けることができなくなると嘆願書が提出された。

すぐに初鹿野は、定信に報告し、他の奉行を集めた。

「松平様、二万両を下賜してもよろしいでしょうか？」

「ちと早すぎるかもしれぬが、やむを得ぬ。明日にでもそのように札差どもに伝えよ」

定信が、言った。

翌日、初鹿野は、奉行所に代表初を呼び、二万両を下賜することを告げた。

札差たちは一様納得して引き下がった。

しかし、十月になると、今までの借金の一部を秋の切米で清算して新規に借りる‘借り貸し金’を貸し渋るようになったため、定信は、奉行たちをあつめた。

「札差の奴ら、今までは、暮れには借りた二十両は返すことができたが、今年はなんと四両、同心などは、一両。これではみな年が越せぬわ。札差の自己資金が足らねば、会所から借りさせろ。久世、すぐにあたれ」

定信は、もみあげに青筋を立てて言った。

勘定奉行の久世広民は、「はい」と言って、頭を下げた。勘定書に戻って、久世は十郎右衛門に命じた。

「すぐに、樽屋に札差たちの意向を聞き出させろ」

十郎右衛門は、承知いたしましたと頭を下げ、席を立ち、槍持ちと草履取を従えて、城を出た。樽屋に着き、草履取が坂部の名を告げると、十郎右衛門は手代に客間に案内された。

十郎右衛門は樽屋を前に、今回の件で定信が怒り心頭していることを伝えた。

「定信様が、お怒りになってもこの問題の解決はなかなか難しいですぞ」

樽屋は平然と答えた。

「樽屋殿、札差たちの本音を聞き出してもらえまいか」

十郎右衛門は、予期した通りの答えを聞いてからいった。

「ここ二日ほど、時間を下され」

承知したとあって、十郎右衛門は、自宅に戻った。

「帰ったぞ」

「おかえりなさいませ」富子が迎えに出た。

「飯を食ったら、また城に戻る。しばらく帰れないので、泊りの支度を頼む」

「それは大変ですね。ご苦労様です」

富子は、女中に夕餉の支度を命じ、十郎右衛門の着替えの準備をした。

一刻半ほどで、勘定所に戻った。

四話

二日の間、十郎右衛門は夜も徹して打開策について検討し続けた。

十郎右衛門の耳に捨て鐘用の太鼓の音が入ってきた。

「もう明け五ツか」

十郎右衛門は、顔を洗いに部屋を出た。

「坂部様、娘様がお弁当を持ってこられました」小坊主に部屋に戻ろうとしたとき、声をかけられた。十郎右衛門の娘は十五になっていた。

「悪いが、受け取ってきてくれ。頼む」と言って席に着き、書類をめくり始めた。

しばらくして、小坊主が弁当を持ってきていった。

「むすめ様が、是非お伝えしたいことがあると言って、お待ちになっています」

十郎右衛門は娘の待っている部屋に行った。

「お父様、おじい様が倒れました。お医者様に診てもらいましたら……」

娘は泣き顔になった。

「なに、お義父上が。仕事が片付いたら帰るから、それまでしっかり面倒見てやってくれ」

弁当を食べ終わると、同僚が次々と部屋に入ってきた。

「坂部、昨日も徹夜か」戸部が声をかけてきた。

「まだ仕事が終わらんからな」

「あまり無理するなよ」

一刻ほどたって、十郎右衛門は樽屋に会いに行くと言って勘定所を出た。

樽屋との話を終え城に戻ると、

「坂部様、お奉行様がお呼びでございます」小坊主から声をかけられた。

十郎右衛門は皆の視線を受けて、部屋を出て久世の部屋に行った。

「坂部です」

「入れ、松平様のお呼びだしじゃ。十郎右衛門、伴をせい」

茶坊主の後に久世そして十郎右衛門が続いて、定信の執務部屋に入った。もうすでに、勘定奉行の久保田、町奉行の初鹿野及び山村そしてその伴たちが座していた。

定信が、上席についた。皆の者ご苦勞といった。みな平伏した。

「いろいろ考えたのだが、札差だけに圧力をかけるだけでなく、不届きな武家の借り手を何人か処罰して、見せしめにしたらどうか。また、札差を一人ずつ呼び出し、利率一割二分では取引できないといった者については、権利を取り上げたらどうか」

一息ついて、さらに続けた。

「一時的に禄高を増やしているだけの足高については、札差たちの意見を聞いて、担保に含めないようにしよう。もう評議に時間をかけられない、暮れの取引については、足高分は会所の資金を充て、法外の借り手は支配頭から注意させ、来春に札差の賞罰という運びにしたらどうか。年を越せないような事態になったら、今までの苦勞が水の泡だ。意見があれば述べてみよ」

「松平様、樽屋を通して、札差の本音を今探っております。明日にその結果が出ますので、お待ちいただけませんか」

久世が言った。

「松平様、利率について交渉している最中です。落としどころを模索していますので、しばしのご猶予を」

十郎右衛門が、続いていった。

「利率はどのくらいを想定しているのじゃ」

「今、四分で折衝しています。もうしばらく時間がかかるかもしれませんが、最悪でも六分で決着させるつもりです」

「わかった、では三日後に再度評定する」定信はムツとした顔をして出て行った。

定信が退出してから、一刻ほど久世たちが評議した。

「十郎右衛門、札差との利率交渉は大丈夫か」

久保田が心配そうに聞いた。

十郎右衛門は、何とか決着させますと緊張した面持ちで答えた。

三日後、六分の利率で幕府と札差たちは合意を得た。

「よかった。これで武家たちも新しい年を迎えることができる」

十郎右衛門は、急いで屋敷に帰った。「父上の具合はどうか」出迎えた富子に言った。

「小康状態です」

十郎右衛門は半の助が臥せっている部屋に行き、声をかけたが、半の助は、鼾をかいているだけで目を開けなかった。

老中の命により、十郎右衛門たちは休む間もなく、次に物価対策に取り組んだ。棄捐令の成功に自信をつけた幕閣たちは、勘定所や町奉行所を総動員させて、高騰する物価を見事に安定させることに成功した。

定信は、これに味を占め、田沼意次の重商主義政策と役人と商人による縁故中心の利権賄賂政治から、朱子学に基づいた重農主義による飢饉対策や、厳しい儉約政策、役人の賄賂人事の廃止、旗本への文武奨励を勧めた。

さらに、海国兵談を書いて国防の危機を説いた林子平らを処士横断の禁で処罰し、田沼意次が行ってきた蝦夷地開拓政策を中止した。また、朱子学だけを正統とし（現在では、寛政異学の

禁といわれている)、昌平坂学問所では朱子学以外の講義を禁じ、蘭学を排除するなどした。結果として幕府の海外に対する備えを怠らせた。

その結果、露西亜が南下政策をとり始めた。

寛政四年（一七九二）九月三日、日本人漂流民である大黒屋光太夫らの返還と交換に日本との通商を求めて、アダム・ラクスマンが根室にやってきた。

五話

ラクスマンからの書状を松前藩が受け取り、定信に持参した。

江戸城では、対応をどうするかで評定が開かれた。

定信は、老中の松平信明、松平乗完（のりさだ）、本田忠壽（ただかず）、戸田氏教（うじのり）そして、寺社奉行・町奉行・勘定奉行に書状の内容を説明し、意見を求めた。

「書状の内容だが、一つは、漂流民を江戸の役人に引き渡したい、二つは、返答がなければラクスマンは船を江戸に向かわせ直接交渉するとのことである。意見を述べよ」

「あくまで江戸への来航を許さず、武力に訴えてでも、根室で打ち払べきです」

「しかし、相手は、我々よりも優れた大砲を持っているようです。負ければ、幕府の権威が失われてしまいます」

「では、こちらの事情を伝え、唯一の外交の窓口の長崎への回航を求めてはいかがでしょうか」

「そのようなことを相手は聞くでしょうか。仕方がないので、蝦夷地の港を開き通商を認めてはいかがでしょうか」

「意見は分かった。使いの者、遅くなったが、経過を説明してくれ」

「はっ、明22(一七八二)年十二月、光大夫たちは、伊勢の白子から江戸への航行中、駿河灘で台風にあい、七カ月間の漂流を続けて翌年夏、アリューシャン列島のアムチトカ島に着いたようです。それから四年後、彼らはカムチャツカ半島に渡り、帰国を願いシベリアを西に向かうことが許され、そして、偶然にも女帝エカテリーナ二世に謁見する機会を得ることができ、我が国への渡航が許されたようです。そのようなわけで、この度、遣日使節 ラクスマンに連れられてきました。彼は、光大夫たちの引き渡しと我が国との通交・通商を強く望んでいます」

「光大夫たちは露西亜の隠密になれ果てたかもしれぬので、光大夫の返還も通商もは拒む方がよい」と松平信明がいった。

「いや、露西亜の情報を得るために、光大夫たちを引き取ったほうがよい」と本田忠壽が反論した。一刻かけても結論が出なかった。定信に決めるよう皆がいった。

その結果、光大夫を引き取るが、通商は拒否するよう定信の命が下った。また、こちらにとって優位な交渉場所として松前を選ぶよう命じた。

交渉の人選は、それぞれ老中たちの管轄する役所から優秀な人材を出すことになった。

交渉人の一人として、十郎右衛門が勘定方から選ばれた。

二日後、定信は十郎右衛門たち交渉人を集めて、訓示した。

「よいか、皆の者。貿易の要求を拒否しないで、長崎のオランダ商館と交渉するように、時間を稼げ。光太夫たちは、引き取るのだ」

十郎右衛門は、屋敷に戻り松前に向かう準備をした。

富子は、支度をしながら心配そうに十郎右衛門にいった。

「あなた、お父様が・・・」

「わかっておる。心配するな、すぐに戻る」十郎右衛門は、声を荒げていった。

松前藩は、光太夫とラクスマン一行を松前に行くことを了承させていた。

十郎右衛門たちは、松前に到着すると、松前藩と事前打ち合わせを済ますとすでに来ていたラクスマンとの交渉に入った。十郎右衛門は国法である鎖国令を読み上げた。

他の交渉人は、ラクスマンに、漂流民送還の労をねぎらい、今回に限り松前において漂流民受領の用意がある旨を説明した。また、通商は拒否すらが、長崎への入港許可書は与えるので、長崎に行くようにと伝えた。

数日間の十郎右衛門たちの説得工作も実を結び、光太夫ともう一人磯吉二人が幕府側に引き渡された。

ラクスマンは、長崎へは行かずに帰路に就いてしまった。

対外政策は緊迫した状況にあった。

もし阿蘭陀が仏蘭西に占領された場合、露西亜が江戸に乗り込んで来る可能性があり、あるいは千島領や阿蘭陀商館の権利が仏蘭西に移る可能性、また英吉利が乗り込んで来て三つ巴の戦場となる可能性があった。

定信は江戸湾などの海防強化を提案し、また朝鮮通信使の接待の縮小などにも務めた。

十郎右衛門は、光太夫から露西亜の情勢を聞き出そうとした。光太夫は、露西亜について知っていることをすべて話した。